河上肇著

陸放翁鑑賞

下

三一書房刊

昭和二十四年十一月十日印刷
昭和二十四年十一月二十日發行

陸放翁鑑賞　下卷
定價　四百二十圓

著者　河上肇
發行者　田畑弘
印刷所　京都市中京區壬生花井町三番地　日本写眞印刷株式会社
製本所　京都市上京區上楳木町通千本東　昭榮堂製本所

三一書房

發行所　株式會社　三一書房
京都市左京區北白川西平井町二四
電話　上局㊗三一〇一番
振替　京都六四〇三番
東京都千代田區神保町一ノ一四

會員番號　A219008

目次

放翁鑑賞　その三
古稀の放翁……三
放翁鑑賞　その四
八十四歳の放翁……一三五
放翁鑑賞　その五
陸放翁詞二十首……二〇七
放翁鑑賞　その六
放翁絶句十三首和譯……二八九
放翁鑑賞　その七
放翁詩話三十章……四一五
後記……吉川幸次郎……四四七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

放翁鑑賞

その三

——古稀の放翁——

はしがき

放翁七十歳の時の作詩は、劍南詩稾について調べて見ると、卷二十九から三十一に亙つて、約二百六十一首に上つてゐる。唐宋を通じて最も多くの詩をのこした放翁は、古稀の年に達しても一年間にかくも多くの詩を作つて居るのである。ここにはその二百六十一首の中から七十四首を選び出し、これを春夏秋冬の季節別にして見た。ところが、僅か一ヶ年間のものでも、かういふ風に列べて讀むと、放翁といふ一人の人間の持ち味が可なり鮮かに浮び上がり、そこには、個々の詩が前後相連ることによつて釀し出されるところの、自叙傳の一斷片にも似た、獨特の

散文的な效果が感じられる。私は各首の詩としての味はひの外に、さうした雰圍氣にも少からぬ興味を有つのである。私はこの稿を昭和十六年の夏のうちに書き了へた。

（昭和十六年八月十八日淸書）

古稀の放翁　その一、春

七　十

七十殘年百念枯
桑榆元不補東隅
但存隱具金鴉嘴
那夢朝衣玉鹿盧
身世蠶眠將作繭
形容牛老已垂胡
客來莫問先生處
不釣娥江卽鏡湖

七　十

七十殘年、百念枯る、
桑榆元と東隅を補はず。
但だ存す隱具金鴉嘴、
那ぞ夢みん朝衣玉鹿盧。
身世蠶眠りて將に繭と作らんとし、
形容牛老いて已に胡を垂る。
客來りて問ふ莫れ先生の處、
娥江に釣らずんば卽ち鏡湖。

○殘年。餘年、餘命などいふに同じ。老いぼれて生き殘つた壽命のこと。七十殘年百念枯とは、もはや七十といふほどの老いぼれた年寄になつて、一切念ふことは無くなつた、といふ意味。○桑榆元不補東隅。桑榆はくわの木とにれの木であるが、こゝでは西方を意味する。後漢書の馮異傳に、『之を東隅に失するも、之を桑榆に收む』とあるに本づく。桑榆は西方を意味する關係から、轉じて夕ぐれを意味し、また晩年を意味する。で、桑榆元不補東隅は、若い時の失敗を今更晩年になつて補ふことも出來ぬ、といふ意味である。○鴉觜。鋭くとがつた鋤のこと。放翁の別の詩に、『詩を題して又た滿つ牛腰束、藥を采りて常に携ふ鴉觜鋤』の句あり。こゝでは藥草を採堀するための鋤と解してよろしい。金鴉嘴の金は美稱。○朝衣。朝廷に出るための制服。○鹿盧。轆轤(ロクロ)に同じ、物を引き寄せ又は吊し上げるに用ひる滑車のこと。しかるに劍首の玉の飾、昔しその形鹿盧に似たり。漢書、雋不疑傳の註に、『古へ長劍の首、玉を以て井鹿盧形を作る。』とあるが如し。これより轉じて鹿轤形の玉の飾ある劍をも鹿盧と云ふ。古樂府に、『腰間鹿盧の劍、千萬餘に直(あたひ)す可し。』とあるが如し。○身世。自分の生涯。身世蠶眠りて將に繭と作らんとすと云ふは、身世恰も蠶の眠りて將

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

に繭と作らんとするに似たりと云ふ意味。○形容。すがた、かたち。○胡。あごからのどにかけての皮と肉が垂れ下がつたもの。○莫問先生處。先生は何處に居られるかと問ふ必要はない。○娥江、鏡湖。放翁が晩年を送つた郷里にある川と湖の名。年中釣に出てゐるので、娥江のほとりに居なければ、鏡湖に泛んでゐる筈だ、と云ふのである。

○この詩は、紹熙五年、放翁が七十になつた年の元旦の作と思はれる。全集には、この次に正旦後一日と題する詩が載つてゐる。彼は六十五歳の時に官を免ぜられてから、郷里に歸り、それ以後家居してゐたのである。彼はこの詩で、那ぞ夢みん玉鹿盧と云つてゐるが、七十八の年にまた出て仕へた。で、宋史本傳には『其の晩節を全うするを得ず』としてある。しかし放翁晩年の出仕には特別の事情があり、趙翼は之を訾議する者を『眞に謂はゆる小人好んで議論し、人の美を成すを樂まざる者なり』と斥けてゐる。それについての委しいことは、また別の個所で誌すであらう。○なほ趙翼の『甌北詩話』には、放翁の詩から好聯の見本がいくつか摘出されてゐるが、この詩の中の『身世蠶眠將作繭、形容牛老已垂胡』の一聯はその一に屬する。これは誰が

見ても好い句だなあと思ふであらう。

老　境

髮白未及童
齒搖未及脫
正如一席飲
燒燭將見跋
谿山環草舍
霜露侵布褐
文章雖自力
亦已强弩末
寧將垂老耳

老　境

髮白きも未だ童するに及ばず、
齒搖(うごく)も未だ脫するに及ばず。
正に一席の飲、
燒燭(セウシヨク)將(まさ)に跋(バツ)を見んとするが如し。
谿山　草舍を環(めぐ)り、
霜露　布褐(フカツ)を侵す。
文章自ら力(ちから)むと雖も、
亦た已に强弩の末。
寧(やす)んじて將(まさ)に老に垂(なんな)んとする耳(のみ)、

更受世事聒　　更に世事の聒を受けんや。
匡廬入我夢　　匡廬　我が夢に入り、
行已寄瓶鉢　　行いて已に瓶鉢に寄る。

○これは七言古詩であるから、一首の中に同じ字が重出して居り、對句も一個所しかない。

○童。頭髮のはげること。○跋。もといふ意味。禮記の曲禮に『燭、跋を見ず』とあるに本づき、こゝには燭まさに跋を見んとすとしてある。燭不見跋とは、燈臺もとくらしと云ふと同じ意味で、蠟燭の光は四方を照せども、そのもとを照さざるを云ふ。○燒燭將見跋とは、燃えてゐる蠟燭がもはや終りに近づきたるを云ふ。蠟燭が短くなつて、もとまで明るくなつて來たのである。燭を秉りて一席の宴を催したるに、蠟燭が段々つきて來て、宴もはや終りに近づいた、その光景に、今の我が晩年は似てゐると云ふので、『正に一席の飲、燒燭將に跋を見んとするが如し。』と云つたのである。○谿山。たにがはと山。○布褐。粗末な着物の意味。布はぬの、昔し無官の庶人

は布を衣服としたる故に、官位なき人のことを布衣（ホイ）と云ふ。褐はあらきけごろも、賤しき者の服、轉じて寒賤の人のことをも褐と云ふ。○强弩末。『强弩の末、力、魯縞に入る能はず。』から來た語。魯縞とは魯の國の產物である薄絹のこと。强い大弓で放つた矢でも、その力の盡きたる末には、薄絹を穿つほどの力もない、と云ふことから力量ある者の衰へたるに譬ふ。○聒。かまびすしく、うるさきこと。○匡廬。昔し匡裕と云へる仙人、廬山に廬を結びて住まひ居たり、との傳說にもとづき、廬山のことを匡廬とも云ふ。今の江西省九江府にあり。九江を南に距ること約十七キロ、奇峰翠巒、迢々として南北に連ること約六十六キロ、北は揚子江に枕し、南は洋々たる鄱陽の大湖に臨む。文學に現はるること最も多く、昔は陶淵明、彭澤の令たること八十日、派遣されて來た督郵に對し、應に束帶して之に見（まみ）ゆべしと云はるるや、『吾豈に五斗米のために腰を折り、拳々として鄉里の小人に事へんや。』とて、卽日印綬を解きて縣を去り、廬山山中の栗里虎爪崖に入り、乃ち歸去來分の辭を賦した。唐の時代になつてからは、李白が來て五老峰下に書堂を結び、『日は香爐峰に照つて紫煙生ず、遙に看る瀑布の長川を挂くるを、云々』といふ詩を賦し、白樂天もまた江州の司馬と

なるや、香爐峰の遺愛寺を訪ひ、『遺愛寺の鐘は枕を欹(そばだ)てて聽き、香爐峰の雪は簾を撥げて看る』といふ句を吐いた。今はすでに荒廢に歸してゐるけれども、それでもまだ山中には三百の寺院があると云ふ。○瓶鉢。瓶はかめ。鉢ははち、托鉢(タクハツ)などといふ語があるやうに、僧侶の食器である。で、行きて已に瓶鉢に寄るとは、夢に廬山に入りて、身はすでに山中の僧舍に寄寓してゐる、といふ意味であらう。

偶懷小益南鄭之間帳然有賦

西戍梁州鬢未絲
嶓山漾水幾題詩
劍分蒼石高皇迹
巖擁朱門老子祠
燒兎驛亭微雪夜

偶〻小益南鄭の間を懷ひ帳然として賦あり

西のかた梁州を戍(まも)つて鬢未だ絲ならず、
嶓山　漾水　幾たびか詩を題す。
劍は蒼石を分かつ高皇の迹、
巖は朱門を擁す老子の祠(ほこら)。
兎を燒く驛亭微雪の夜、

騎驢棧路早梅時　　驢に騎る棧路早梅の時。
登臨不用頻悽斷　　登臨用ひず頻りに悽斷するを、
未死安知無後期　　未だ死せず安んぞ後期なきを知らん。

○劍分蒼石高皇迹の句には、『幡家廟の傍に高皇の試金石あり、中分截るが如し。』の自註があり、巖擁朱門老子祠の句には、その自註に『三泉道上に老君の洞あり、景趣幽邃。』としてある。

○この詩は作者が二十餘年前のことを思ひ出しての作である。年譜を見るに、乾道六年の條下には、『先生年四十六、閏五月を以て行を起し、十月二十七日夔州に到る。』としてある。けだし前年十二月、夔州の通判に任ぜられた爲めである。夔州は蜀（今の四川省）の東境に近い所で、放翁の鄉里紹興縣（上海の南に當る）からは非常にかけ離れた奧地であり、赴任するため途中六ケ月を費したのである。彼はその後、蜀の各地に轉任し、年五十四の時、卽ち九年ぶりに蜀を離れて東歸した。この詩は當時の思ひ出の一つである。彼の詩集を見るに、乾道八年、四十八歲の時の詩には、老君

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.